

世界通貨としての日本円のあり方

茨城大学 中島善太

現在、世界の主要通貨といへば、まづ米ドル、次いでユーロ、この二つにやや距離^{へだたり}をおいて日本円といふのが常識であらう。米ドルは Western Hemisphere で名實ともに盟主であり、域内の通貨は何らかの形で米ドルと密接な関係を保ってゐる。所謂 dollarisation の動きも活潑である。ユーロは云ふまでもなく EMU12 カ國の共通通貨である。EMU のメンバーはこれからもっと増えるであらう。かうした中であって、日本円はいかに自己主張していくべきか。

この問題を考へるにあたって大切な視点は次の二つであらう。一つは當面の日本自身の self-interest であり、もう一つはより長期的な東アジア諸國との關係である。この二つの視点は相互に密接に絡合^{からみあ}ふ。まづ日本の self-interest についてである。日本円は 1970 年代初め他の主^{おも}立った通貨とフロートに移行して以來今日に至るまで、米ドルに對して劇^{はげ}しい volatility を伴ひつつ趨勢的に円高の道を辿ってきた。それは 300 円/ドル前後から 100 円/ドル近傍への道であつたといつてもよい。一方、日本は 1980 年代から今日にかけて對外的に年々々々多額の經常黒字を續け、それと表裏一體的に對外債權が累積した結果、今日 130 兆円餘りの對外債權（ネット）を保有してゐる。絶えざる円高傾向は巨額の對外債權の目減りに直接つながる。これを防ぐには、円の國際化により貿易及び資本取引をドルから絶縁する以外にない。

次に、東アジア諸國との關係である。1997 年央から 1998 にかけての東アジア危機以來、數か國がそれまでのドル・ペッグ^{いっぺんたう}一邊倒のスタンスを見直し、フロートなどへ移行した。これらの諸國は何れまた固定レート・レジームに回歸するかもしれない。それまでに、日本は景氣や物價の安定化に努め、円を嘗てのヨーロッパにおけるドイツマルクのやうに東アジアの nominal anchor たらしめていくことを眞剣に考へるべきであらう。今後、日本と東アジアの關係が深まっていく上で、相互連帶^{かすがひ}の鋳^{くわ}の一つに円を育てていくことこそ、日本が自らのイニシアティブで貢獻し得る重要なファクターなのではなからうか。